新島の医療・看護への志の具現化：宣教看護婦 L. リチャーズ達の活躍

加えて，近代医療の先進国であったアメリカから宣教医 J. C. ベリー，宣教看護婦 L. リチャーズ達を病院・学校設立ブレインとして迎えたことが，新島の医療・看護への志の具現化に大きくつながったと考えられる．L. リチャーズはアメリカ最初に訓練を受けた看護婦であり，F. ナイチンゲールに直接指導を受けた後，実際にボストン市立病院看護学校での教育を実践し，実績を積んだ後に来日した．そのため，京都看病婦学校ではじめた看護教育システムや内容には，F. ナイチンゲールの考え方や彼女自身が経験してきたボストンでの看護教育を範とした，当時としては世界的にも最新の看護実践や教育を日本に直輸入していたことがうかがわれた．例えば，生徒の規律に「生徒はまじめ，正直，誠実，信頼に足る，時間を守る，落ち着いて従順，清潔できちんとしている，忍耐強く明るく親切でなければならない」（京都看病婦学校規則，1887年）と示しているが，それとほぼ同様の内容がボストン市立病院看護学校規則（1878年）あるいは救貧病院における看護（聖トマス病院での訓練，1867年）にも示されている．また，京都看病婦学校卒業生の多くに，日本や海外で幅広く活躍した足跡をみることができる．それらは，L. リチャーズ達による看護教育とその実践が，当時の日本だけでなく世界的にもレベルの高い，先進的で国際感覚豊かなものであったことを示していると考えられる．

京都看病婦学校は，新島亡き後，同志社の手を離れ，医師佐伯理一郎にその運営は委ねられ，第二次世界大戦後，看護の新制度に切り替わるまで続いた．キリスト教精神に基づいた佐伯の看護職育成への志は，米寿記念の碑に刻まれている「受くよりも与うるは福也」の聖句からも偲ばれる．このような新島や佐伯の看護職育成の志を引き継ぎ，そして当時導入された先進的な看護教育の原点をみつめながら，同志社らしい看護学教育を構築していきたい．

（平成27年12月六史学会合同例会）

佐賀薬種商野中家所蔵解剖書について

青木　歳幸

野中家は，寛永3年（1626）創業の代々製薬業を営んできて現代のウサイエン製薬株式会社まで，約400年の歴史を誇る老舗薬種商である．慶応3年（1867）のパリ万博にも参加するなど，佐賀藩の御用達商人としても活躍した．

同家は，江戸前期からの薬種商としての必要な医薬書が蓄積されて，『医学天正記』，『延寿撮要』，『東医宝鑑』のほか，明治期の『御殿診籍（天璋院篤姫診療記録）』などにいたる江戸前期から幕末・明治期にかけての漢方医薬書が多数所蔵している．さらに西洋医学の普及にともない，西洋外科書・翻訳書，洋文の原書も少なからず所蔵している．佐賀大学では，平成24年10月から，ご当主の了解を得て，野中家蔵書の整理にあたっており，本報告は，野中家所蔵の外科書のうち，解剖書の『蔵志』，『施薬院解体図』，『解臓図賦』，『解屍新編』，『解体新正図』の5点の紹介である．

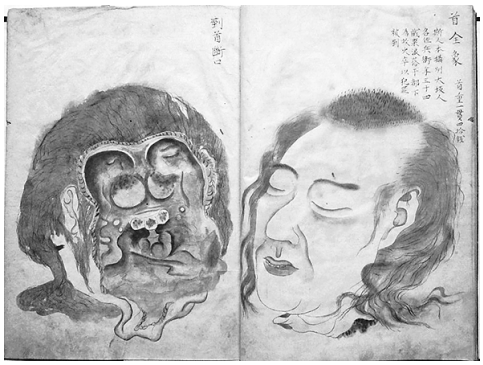
1.『蔵志』（刊本）

京都の医師山脇東洋が，宝暦4年（1754）に，京都の六角獄舎で観臓を実施し，5年後の宝暦9年に『蔵志』を刊行したもので野中家にも所蔵されていた．以後，門人栗山孝庵が，萩で宝暦8年に男屍を，宝暦9年に女屍を解剖し，古河藩医河口信任は，京都で明和8年（1771）に男屍の頭部や眼球を含む解剖を実施し，翌明和9年に『解屍

編』として刊行した.

2.『施薬院解体図』（写本）

寛政10年（1798），施薬院の三雲環善と山脇東海が，34才男子佐兵衛の解剖を実施し，その解剖図が『施薬院解男体蔵図』である．タテ26cm，ヨコ19cm．44丁冊子．京都大学図書館・早稲田大学図書館本・国会図書館（巻子），杏雨書屋本，羽間平三郎本などが知られているが，野中家本の存在は今まで知られていなかった．野中家本は，『施薬院解体図』（写本）と表題のある冊子に描かれ，筆写の段階で蘭語が省略されているが，解剖図は原図をかなり忠実に模写してある．筆写者は不明だが，筆写時期は「身全象（全身図）」の解説に「斯人在大阪有罪被点大阪之墨刑（下略）」とあり，大阪の語から明治期かと推察できる．

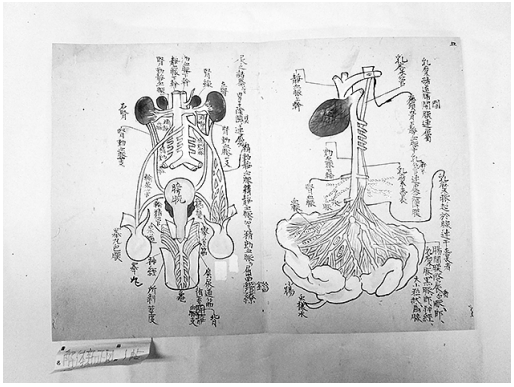


3.『解臓図賦』（刊本）

『解臓図賦』（刊本）は，文政4年（1821），京都の蘭方医小森桃塢が主宰し，門人池田冬蔵らが執刀した解剖を翌5年に刊行したもの．参加者が総数123名で，江戸期における最大規模の解剖であり，乳び管が初めて実見されるなど，各地に解剖知識の普及に果たした役割は大きい．

4.『解屍新編』（写本）

『解屍新編』（写本）は，『解屍編』に疑問を抱いた下野那須郡出身の儒者諸葛君測（琴台）の監督のもと，寛政年間に日光で行われた解剖を晁貞煥（俊章）著，元正匡輔画で図示したもの．「寛政乙卯（1795）之冬」の日付で，当時の所蔵者下旭野隠士の跋文があり，末尾には文政10年（1827）8月23日に鈴木雅長が写したとある．本書に「日光山御医師山中療養院蔵」の蔵印があることから，山中療養院の旧蔵であったことがわかる．京都大学富士川文庫にも1点ある．



5,『解体新正図』（写本）

『解体新正図』（写本）は，明治3年に仁良川（現下野市仁良川）で行われた解剖を8枚の図にまとめたもの．『解体正図』は，下野国の壬生藩で，藩医の齋藤玄昌（玄正）らを会主として天保11年（1840）12月11日におこなわれた解剖の彩色図で，『解体新正図』は，『解体正図』と同様8枚にまとめ，末尾に「右者於野州仁良川解体，明治三庚午歳二月十六日，会主田谷隆輔　清斎印とある．野中家本以外にほとんど見ることがない解剖図である．

以上から，山脇東洋によって，解剖への道が開かれ，寛政期に京都を中心に行われていた解剖とその図の制作が，文政期には地方でも行われるようになり，また幕末・明治期の下野での解剖図も佐賀に普及していたことなどが判明し，野中家所蔵の解剖図から我が国近世の解剖の発達史が読み取れる．今後はこれの解剖図の歴史的変遷と人体観への影響や，美術史的観点の進化などを解明していきたい．

（平成27年12月六史学会合同例会）